

## 幕末明治の写真師列伝 第五十八回 内田九一 その二十三

内田九一は日本橋、築地にも分店を開いたといわれている。この日本橋、築地の分店については従来詳細が不明であったが、明治10年に行われた第一回内国勸業博覧会の出品目録の東京府第四類に、「寫眞（一）紙、諸国名所ノ圖、（二）人物像 日本橋通四丁目 長谷川與志」「寫眞（一）紙、活字機械圖、浅草代地内田九一 築地二丁目 平野富二」とあることから、日本橋の分店はこの日本橋通四丁目の長谷川與志の店に、築地の分店は、築地二丁目の平野富二の商店か、あるいは築地三丁目の上野幸馬と田川謙三の店にあったかもしれない。これも今後の内田九一研究の課題の一つになる。

もう一つ、内田九一の銀座の分店は、明治6年6月から明治9年4月までであったことが、大久保一翁東京府知事宛てに出した『以書付を願上度』という公文書で確認できる。それによれば内田九一の分店の一つは、銀座三丁目十五番地西側角にあった。また、この時の内田九一の住所は「第五大区一小区 浅草瓦町貳拾七番地」と書かれているが、ここは浅草大代地の写真館のある場所である。

さらに東京都写真美術館編『夜明けまえ 知られざる日本写真開拓史 I. 関東編 研究報告』（東京都写真美術館、2007年）所収の、ルーク・ガートラン博士の「希有な才能と手腕と熱意をそなえた日本人写真家 内田九一と外国人常連客」によれば、日本で4年間をお雇い外国人（物理学教授）として過ごしたグリフィス（注1）が出版した『Guide book of Yedo, by a resident』（居留者による江戸案内書）（1874年）という小冊子で、「東京で名所写真を購入するには、東部なら浅草に通じる道沿いか、西部なら京橋近くの通り沿いにある内田写真館に行くべし」と述べている。この「京橋近くの通り沿いにある内田写真館」が、日本橋か銀座の分店のことであろう。グリフィスは内田写真館の常連客であったことから、この記述は信頼できる。日本橋通四丁目の分店とは、写真プロマイドを販売する店で写真店「清春堂」という名の店であったが後に廃業している。このことは「明治商売往来」の「幻灯屋」の項および『続・明治商売往来』の「わたしのきりゑづ 通三丁目・四丁目」の項を参照していただきたい。

『日本写真史年表』（社団法人日本写真協会編）明治7年（1874）の項によると、松崎晋二（注2）、内田九一、横山松三郎は上野で「台湾征討写真展」を開くとあるが、詳細は不明。ただ、松崎晋二は翌明治8年（1875）2月16日にこの台湾征討写真の販売を始めている。

『アサヒグラフ臨時増刊 写真百年祭記念号』（東京朝日新聞社、1925年）の「内田九一氏と東京隅田川の舟遊」（平田健一氏所蔵）の写真は、掲載写真の説明文によれば明治7年（1874）頃の撮影のもので、舟中欄干のもたれている人物は内田九一である。

別冊歴史読本『幕末・明治古写真帖』（新人物往来社）には、明治7年（1874）に国会開設を目指して民選議員設立建白書を提出した「板垣退助」の写真が掲載されているが、この写真も内田九一の写真館で撮影されたものである。

明治7年（1874）10月13日から20日（18日は休刊）の「官許 横浜毎日新聞」（第1164号～第1170号）に以下の広告記事がある。

「写真師内田九一、馬車道で開業の広告」  
「○広告 本港馬車道通 写真師 内田九一  
拙業、諸君子の愛顧に憑り日昌月盛に相運ひ感佩不過之、因て猶又該所於て来る十五日より開業候間、四方諸君子依旧御枉躑の程冀望候なり。戊十月」

また、明治8年（1875）8月24日から9月3日（8月29日は休刊）の「官許 横浜毎日新聞」（第1422号～1430号）の広告には、

「今般開業仕候内田九一製造寫眞圖ノ儀者日本国中名所風景並高名人物芸妓役者其外教多新繪澤山ニ御座候間遊覽ノ上御用向仰付被下候様偏ニ奉願上候  
寫眞圖売捌所 横浜馬車通常磐町七十四番地 内田」

この広告は、明治6年（1873）3月22日に相生町から出火した火事で相生町以南の港町河岸までの二十五町、1557戸を焼失した大火により内田九一の馬車道通りの写真館も焼けてしまい、内田九一が再び横浜馬車道通りで写真館を再開業（新装オープン）したことを意味すると思われる。また、この「横浜馬車通常磐町七十四番地」は、『横浜全図』（明治17年（1884）5月出版）と現在のゼンリンの地図を比較してみると、今の常磐町5丁目64番地と尾上町5丁目77の1との間辺りになり、ヨコハマスルガビル（スルガ銀行横浜支店）裏と鳳ビル67の間辺りの場所になる。同じ場所で写真館を再開業したかどうか不明ではあるが、この場所に内田九一の横浜馬車道通りの写真館があったと考えていいと思う。松信太助編、石井光太郎、東海林静男監修『横浜近代史総年表』（有隣堂、1989年）の明治8年8月の「内田九一、常磐町に国内名所・高名人物等の写真販売店を開業」という記述もこの広告による。

注1：ウィリアム・エリオット・グリフィス（William Elliot Griffis）（1843年9月17日～1928年2月5日）は、アメリカ合衆国出身のお雇い外国人、理科教師、牧師、著述家、日本学者、東洋学者。

注2：松崎晋二  
横山松三郎外二三の士に寫眞術を学ぶ、明治五年小笠原島を四切を以て撮影、明治七年台湾役に我邦最初の従軍寫眞師として活躍、同九年長谷川吉次郎と共に、明治天皇御巡幸に供奉し、沿道撮影に當つた。又、乾板研究に熱中し、その自製に當つた。明治十九年「寫眞必要寫客の心得」を刊行、本郷湯島居住。（梅本貞雄編『日本写真界の物故功労者顕彰録』（日本写真協会、昭和27年）より）  
（森重和雄）